

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 高 謙

論文題目 現代中国語の“让”構文における意味的連鎖の形成

### 論文審査担当者

主 査	名古屋大学准教授	勝川 裕子
委 員	名古屋大学教授	丸尾 誠
委 員	名古屋大学教授	杉村 泰

## 博士論文の結果の要旨

### [本論文の意義]

〈N<sub>1</sub>+让+N<sub>2</sub>+VP/AP〉を基幹構造として表される現代中国語の“让”構文は複数の意味を有する多義文である(以下, N<sub>1</sub>, N<sub>2</sub>は名詞性成分, VP は動詞句, AP は形容詞句を表す)。例えば, 次の例(1)で示す“让”構文は, 「授与」, 「使役」, 「受身」の意味で解釈され得る。

(1) 那些苹果呀, 都让我老妈吃了。

- a. あれらのリンゴはね, 母さんに食べてもらうよう全部譲った。【授与】
- b. あれらのリンゴはね, 母さんに全部食べさせた。【使役】
- c. あれらのリンゴはね, 母さんに全部食べられてしまった。【受身】

本論文は, “让”構文がこのような複数の意味機能を兼用するに至った過程を分析し, “让”構文が表し得る「授与」から「使役」, 「受身」までの意味的連鎖の形成過程を精緻に記述することを通じて, 当該構文にみられる言語変化の諸相とその動機付けを明らかにすることを目的としている。

特定の言語事象における変化現象を論じる際, 従来, 古典資料を根拠にその出現や発展, 定着段階に基づいて分析する通時的研究が主流であり, 意味的な変化を記述することに重点が置かれてきた。このような通時的視点に加え, 本論文では, “让”構文の内部構造と各構成要素の意味機能を粒さに観察することを通じて, 使役範疇内の分化について考察するとともに, 使役範疇から受身範疇へと拡張していく過程とその動機付けを明らかにしている。“让”構文が「授与」から「使役」, 「使役」から「受身」へと拡張していく文法化ルートを一貫して構文的観点から捉えようとする記述からは, 本研究の言語変化に対する独創的な眼差しが窺える。言語変化や文法化が起こる際, 「変化」した要素の背景には必ず「不変」の要素が存在するが, この「不変」の要素も言語変化現象の一側面として意識的に捉えるべきであると本論文は主張している。このような観点に基づき, “让”構文の意味的, 構造的変化を分析した結果, 文末述語成分 VP/AP が一貫して〈N<sub>1</sub>+让+N<sub>2</sub>+VP/AP〉に影響を与え, 連続的に再分析されることで, 「授与」から「使役」, 「使役」から「受身」へと文法化が進んだことを明らかにしている。この点において, 本論文は新規性があり, 高く評価できる。

### [本論文の概要]

高謙氏の博士論文は序章, 終章を含む全 6 章で構成されている。

“让”構文が表す使役義は授与動詞“让”[譲る]から拡張した結果であると同時に, 受身義へと拡張する基盤となっている。第 1 章では, “让”構文において中心的意味を担う使役義を考察対象とし, 使役範疇内における細分化が行われている。まず, 統語的, 意味的特徴に基づいて“让”構文が表す使役機能を「具体的使役」, 「抽象的使役」に大別し, さらに「具体的使役」の下位類として「a. 指示使役」, 「b. 許可使役」を, 「抽象的使役」の下位類として「c. 放任使役」, 「d. 誘発使役」を設定している。

(2) a. 男朋友让狗趴下。【指示使役】

[彼氏は犬に伏せをするように命じた。]

b. 老妈始终让我和心爱的人在一起。【許可使役】

[母は私が愛する人と一緒にいるのをずっと許してくれていた。]

c. 大批在场的军警，让暴徒为所欲为。【放任使役】

[その場にいた大勢の軍隊と警察は、暴徒に勝手放題させるしかなかった。]

d. 吸烟让他的牙变黄了。【誘発使役】

[喫煙が彼の歯を黄ばませた。]

これらの4つの下位類は、使役者  $N_1$ 、被使役者  $N_2$  それぞれの意志性の有無や否定副詞との共起関係などを検証して得られたものであり、本章では各種使役タイプ間の異同と連続性について体系的に説明されている。

第2章では、“让”構文が「使役」から「受身」へと拡張する原因とプロセス、およびその動機付けについて考察が行われている。中国語の受身文〈 $N_1$ +被+ $N_2$ +VP〉は、一般に、動作対象  $N_1$  が動作主  $N_2$  からの動作 VP を受けて被害にあったことを表す。これは「 $N_1$  にとって  $N_2$  が動作 VP を行うことは望ましいことではないが、それに抵抗せず、消極的に受け止める（受け止めざるを得ない）」ことを意味する。一方、“让”構文〈 $N_1$ +让+ $N_2$ +VP〉における「許可使役」と「放任使役」は、被使役者  $N_2$  が自らの意志で行う動作 VP に対し、使役者  $N_1$  は「阻止せず、何もしない」ことを表す。本章では、この「 $N_2$  自らの動作 VP に対して、 $N_1$  は何もしない」という特徴こそが、使役義と受身義の意味的な類似点であると述べている。また、この分析を踏まえ、“让”構文が表す「許可使役」、「放任使役」、「受身」における構文的異同を抽出した結果、「受身」においてのみ V の補語および  $N_1$  の述語機能を兼用する成分  $CP_1$  が義務的に要求されることを指摘し、この  $CP_1$ こそが“让”構文が受身機能を獲得する形式的動機付けであると主張している。

(3) a. 农民们……，缺乏知识，单纯追求粮食产量，结果收了玉米，又遇到下雨天，只好让玉米杆烂在地里。【放任使役】

[ (略) 結局、トウモロコシを収穫した後、また雨天に遭い、トウモロコシの茎を地中で腐らせるしかなかった。 ]

b. 脚底让玉米杆扎破了，手也破了。【受身】

[足の裏にトウモロコシの茎が刺さり、手も傷ついてしまった。]

続く第3章では、“让”構文の形成と文法化のルートを通時的、共時的観点から捉え直し、当該構文の文法化過程における「不変要素」と「変化要素」を中心に考察している。第1章、第2章で考察した通り、“让”構文は「授与」、「使役」、「受身」といった異なる文法範疇で用いられ、“让”構文の内部構造もそれぞれ異なる。しかし、いずれも〈 $N_1$ +让+ $N_2$ +VP/AP〉を基幹構造としており、「伝達」という中心義によって支えられている。これは“让”構文の文法化過程における「不変要素」に相当する。一方、文末述語成分 VP/AP の使用範囲の拡大や複合構造の定着に伴い、“让”自身の意味や品詞が変化し、文中の名詞性成分 ( $N_1$ ,  $N_2$ ) の使用範囲も拡大されることとなった。これが“让”構文の文法化過程における「変化要素」に相当する。本章ではこれを踏まえ、“让”構文の文法化は、文末述語成分 VP/AP の漸次的な変化が〈 $N_1$ +让+ $N_2$ +VP/AP〉全体に影響を与えることにより、再分析を経て実現したもので

あると結論付けている。

第 4 章では、“让”構文の意味的、構造的変化を今一度言語理論に基づいて整理し直すことで、本論文の“让”構文に対する言語変化観を概括している。“让”構文の言語変化に関するこれまでの先行研究では、変化した事象のみが分析の対象とされ、変化しなかった要素に関心を払う論述は少なかった。第 3 章でも指摘しているように、言語変化には常に「変化要素」と「不変要素」の両局面が存在し、この「不変要素」も言語変化現象の一側面として意識的に捉えるべきであると本論文は主張している。本章では、“让”構文において変化した要素・要因だけでなく、変化しなかった要素・要因は何か、変化しなかった要素・要因はどのように変化現象を制限し、誘導したかについて考察している。

最後に、構文化理論に基づき、「授与」、「使役」、「受身」の間には継承性が認められることを指摘している。この継承リンクは、現代中国語の“让”構文だけでなく、中国各地の方言や他言語にも認められることから、本論文の研究成果は“让”構文の個別的な事象研究にとどまらず、一般言語学や類型論研究、さらには言語と人間の認知的活動に関する研究へのフィードバックも期待され得ると今後の展望を述べている。

#### [本論文の評価]

口述試験では、学位申請者から博士論文の概要説明が行われた後、審査委員からそれぞれコメントおよび質問がなされ、学位申請者との間で詳細な質疑応答が行われた。

審査委員から寄せられた主な指摘、コメントを以下に記す。

本論文第 1 章では使役義を表す“让”構文の細分化がなされているが、先行研究における分類に基づき再分類されているため、従来の解釈との差別化が明確に示されておらず、やや斬新さを欠くものである。これまでの意味に偏重した分析とは異なり、本論文では“让”構文の各構成要素の特徴を詳細に分析しており、形式的根拠も十分に示されていることから、分類自体も独自の基準に基づいてなされるべきであったと思われる。また、分析の対象が“让”構文の内部構造のみに限定されるあまり、同じ事象を繰り返し分析、解釈する傾向が顕著にみられ、特に第 1 章、第 2 章の論展開が冗長に感じられる。現代中国語の使役マーカーとしては“让”以外にも“叫/使/令”などがあり、受身マーカーとしては“被/叫/给”など複数あるものの、本論文ではこうした類似するマーカーとの対照については考察が十分であるとは言えず、「授与」、「使役」、「受身」などの文法範疇における“让”構文独自の特徴や相対的位置付けについても議論を尽くしたとは言い切れない点が惜まれる。

このような不備不足や改善点、今後の検討課題について指摘がなされたものの、本論文で示された“让”構文の分類体系は意味と統語的根拠に支えられた説得力のあるものであると高く評価できる。加えて、“让”構文の言語変化を通時的、共時的両側面から多面的に分析することを通じて、「授与」、「使役」、「受身」といった文法範疇の意味的、構造的関連性を明らかにした点において独創性を見出すことができる。

以上の評価に基づき、審査委員は全員一致して、本論文が博士学位に相応しい内容であると判断した。